K-814

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第１４集

# 高楯城跡発掘調査報告書

## ―― 外郭西辺部地区 ――

2007

山辺町教育委員会

# 序

この報告書は、山辺町教育委員会が調査主体となり、発掘をおこなった高楯城跡（外郭西辺部地区）の調査結果をまとめたものです。

発掘調査は、安達健一氏所有の畑を農地転用し、アパート建築用地とする民間開発事業に係るもので、分布調査を平成18年7月19日 同20日に、本発掘調査を同年9月26日から10月26日にかけて実施しました。

高楯城は、武田惣内信安が宝徳元年（1449）に山形・最上家の命令で地域を支配するようになり築城したと伝えられ、その後天正十年（1582）頃には、山形・最上家の末裔にあたる高楯遠江守正福が城主となり、元和8年（1622）の最上家の改易まで、最上家の西北の備えとして重要な位置を占めていたものと思われます。

高楯城跡は山辺地区の北西にあたり、隣接する中山町、山形市を見渡せる小高い丘を利用した平山城であります。現在の天満神社境内周辺を主郭とし、主郭の直下には地形に合わせた曲輪が配置され、そのまわりに二の堀、三の堀を巡らしており、堀の内には町屋や寺院を配置して城館を築いていたと推定されます。

平成11年、12年に、城の主郭にあたる南側と城の主郭直下にあたる西側部分の発掘調査を実施していて、堀跡、井戸跡、住居跡が検出されております。

今回の調査では、柱穴、土坑、溝跡等の確認が出来たことで、歴史を解明していく上で貴重な資料として、郷土史研究の一助となればと存じます。

最後に調査にあたってご指導とご協力を賜りました関係各位に心から深く感謝を申し上げます。

平成１９年３月

山辺町教育委員会

教育長　飛　塚　光　男

# 例　　言

1．本書は民間宅地開発事業に係わる「高楯城跡」の外郭西辺部地区の発掘調査報告書である。

2．緊急調査は事業主の依頼により、山辺町教育委員会が担当した。

3．調査要項は下記の通りである。

遺跡名　　高楯城跡（たかだてじょうあと）

調査対象地　　山形県東村山郡山辺町大字山辺字芦沢９６０－１

遺跡番号　　県遺跡番号３４６　山辺町遺跡番号ＹＭ２

現地調査　　平成１８年９月２６日～同年１０月２６日

調査主体　　山辺町教育委員会

調査面積　　２，２０８．４３㎡

調査体制　　調　査　員　茨木光裕（日本考古学協会会員）

調査補助員　高橋玄寿

調査作業員　久連山良夫・伊藤重雄・伊藤豊・横山悌悦・小松紗耶加

事　務　局　飛塚光男（教育長）・多田裕一（生涯学習課長）

大山ルミ（文化係長）

調査協力　　安達健一・山辺町建設課・山辺町文化財調査委員会

株式会社武田組

4．本書の作成・執筆は茨木光裕が行い、編集は山辺町教育委員会文化係が担当した。

# 凡　　例

1．本書で使用した遺構の分類記号は以下の通りである。

ＳＢ…掘立柱建物跡　　ＳＤ…溝跡　　ＳＭ…土塁状遺構　　ＳＡ…柱穴列

ＳＲ…道路状遺構　　ＳＫ…土坑　　ＥＰ…柱穴　　Ｓ……礫

2．遺構番号は、現地調査段階での番号を踏襲していない。本書作成時に再度番号を付した。

3．本書挿図の方位は磁北を示している。

4．Ⅰ区及びⅡ区とした調査区グリッドの南北軸は座標系に拠らず、現地に合わせた任意の設定とした。グリッド南北軸は、Ｎ－１８°　２０′－Ｅである。

5．遺構実測図は原則として１／２０、１／４０で採録し、各挿図にスケールを付した。

6．遺構実測図にある水系レベルは標高を示している。その単位はｍである。

# 目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1
　1　調査に至る経過
　2　調査の方法と経過
Ⅱ　遺跡の概要……2
　1　調査区の層序
　2　遺構の分布
Ⅲ　検出された遺構……2
　1　掘立柱建物跡（ＳＢ３、ＳＢ４）
　2　土塁状遺構（ＳＭ１）と柵列（ＳＡ２）
　3　土坑（ＳＲ）と道路状遺構（ＳＲ）
Ⅳ　調査のまとめと考察……3
抄録……１３

# 挿　　図

第１図　高楯城全体図
第２図　調査区全体図
第３図　Ⅰ区遺構配置図・集成図
第４図　Ⅰ区遺構部分図･ＳＭ１土層図
第５図　各トレンチ土層集成図

# 写真図版

図版１　１．Ⅰ区全景
　　２．調査状況
　　３．Ⅰ区遺構検出状況
図版２　１．Ｃトレンチ全景（東から）
　　２．Ｄトレンチ全景（東から）
　　３．Ⅱ区堀跡検出状況（南から）
図版３　１．Ⅰ区ＳＢ３、ＳＢ４近景（南から）
　　２．ＥＰ５検出状況
　　３．ＥＰ８検出状況
図版４　１．ＥＰ検出状況（北から）
　　２．ＳＫ検出状況
　　３．ＳＲ検出状況（南から）
　　４．Ⅱ図全景
　　５．ＳＭ１検出状況（南から）
　　４．Ｄトレンチ南壁土層状況
　　５．ＳＢ３、ＳＢ４検出状況（南から）
　　４．ＥＰ６検出状況
　　５．ＳＭ１トレンチ北壁土層断面
　　５．ＳＤ、ＥＰ検出状況
　　６．ＳＲ検出状況（南西から）

# Ⅰ　調査の経緯

## 1　調査に至る経過

高楯城は山辺町中心街の北西に位置する標高約１２０ｍの小丘に立地する城館跡で、主郭である丘陵頂上部に天満神社が鎮座している。主郭部分は略方形を呈し東西２０×南北２６ｍ程で比較的狭いが、主郭の南に平坦な広い２段の曲輪が存在する。さらにその西側にも一段下がった曲輪が存在し、主郭北側にも２条の帯曲輪を配置しその下段にも曲輪が認められる。

高楯城が立地する丘陵は主郭部分の最高所で標高１２０．４ｍを測り、東側山麓からの比高約１０ｍ程度の低平で東西約７０ｍ、南北約１８０ｍの丘陵地である。この南北に連なる丘陵地を利用し、主郭を中心として段々状の曲輪群と丘陵斜面に帯曲輪を配置した縄張りとなっている。村絵図等によれば城館跡が存在する丘陵山麓を囲む堀が存在し、西と北・東の三方に町場を囲繞する「二の堀」が在ったと想定されている。南側は東流する芦沢が弾正淵と呼ばれる深い峡谷を形成して南縁を限り、隣接して所在する山野辺城との境界をなしている。虎口の構造は後代の改変によって明確ではないが、北東山麓より屈曲して主郭に取り付く現参道付近と想定される。

当該城館跡については、いずれも開発行為に伴って以前にＡ、Ｂ各地点で計２次の調査が行われている。今次の調査地点は城館跡が立地する丘陵の西側で、外郭西側を区画する堀跡が存在したと想定される地点である。平成１８年６月に山辺町教育委員会に埋蔵文化財有無についての確認があり、それを受けて平成１８年７月１９、２０日に試掘調査を実施した。その結果、調査地西側に南北に連なる堀状の落ち込みが存在し、その内側（東側）に柱穴や溝跡、土坑等の遺構が確認された。特に調査地東側に遺構が密に分布し、遺構面が浅いことから工事等に伴って破壊されるため関係者と協議し、事前に緊急調査を実施することとした。

調査は平成１８年９月２６日より開始し同年１０月26日に終了した。

## 2．調査の方法と経過

試掘調査の結果から、調査地の西側に高楯城の西縁を画する堀状の落ち込みが存在すると考えられた。この部分については、地山が深くトレンチを設定し落ち込み線を確認するに留め、南側よりＡ～Ｄの４本のトレンチを設定した。またこの東側は遺構面が浅く集中することから１０×１０ｍのグリッドを設け面的な調査を実施し、グリッド東西側のｂ列南側調査区をⅠ区、北側に延長した調査区をⅡ区とした。

調査は地山の直上まで重機で掘り下げ遺構を検出したが、Ⅰ区西側とⅡ区は地山が深く堀の覆土と考えられる粘質な黒色土が堆積しており、地山面までは完掘していない。

現地での調査は平成１８年９月２６日より開始した。調査区を設定し現場の環境整備の後、重機で表土の除去を行い、並行して人力で地山面まで掘り下げ、面整理・遺構検出を実施した。その後、遺構の調査、記録、写真撮影等を行い１０月２６日に現地での作業を終了した。ただ調査期間中、幾度か降雨により現場が水没し、掘り下げた調査区壁面が崩落する事態となり調

査期間の関係で検出遺構全てを精査することが出来なかった。そのような遺構については平面プランの確認と記録に留めてある。調査期間の実働日数は１７日である。

## Ⅱ　遺跡の概要

### １　調査区の層序

調査地がかなり広いため各地点で基本的な層序に違いがあり、共通した状況は把握し得ない。Ⅰ区では約15㎝の表土の下に淡茶褐色を呈する砂質土層（第３図A- A′土層柱状図Ⅱ層）がある。平均的な層厚は25㎝で耕作土である。同図Ⅲ層は、くすんだ黄灰色土でブロック状に粗砂を含みパサパサした感じの土層である。Ⅳ層は平均層厚５㎝の薄い土層で砂粒の混入がⅢ層より多く、地山直上の漸移層である。Ⅴ層は黄褐色を呈する粗砂質の地山層で地表から深さ40～50㎝である。場所により拳大の風化礫を含む。

Ⅰ区西側ではⅤ層の地山が深く落ち込み、その上位に茶黒色の粘質なシルトが堆積し堀の覆土と考えられる。北側に延長したⅡ区でも堀部分の基本的層序は同一である。

調査地の西側に東西方向に設定した４本のトレンチは、いずれも堀の部分に相当する場所と考えられる。従って各トレンチでの基本的な層序はほぼ同一で、表土の下位に山砂利や炭化した廃材等で埋め戻された再堆積土が存在する。その下位に堀の覆土と考えられる黒色や暗褐色を呈する粘質なシルトが堆積している。各トレンチの地山面はかなり深く調査期間の関係もあり全掘はしていないが、部分的にサブトレンチを設け検土杖と併用して地山の深さを確認するようにした。それによれば、地山は淡青灰色を呈する砂質土で地山面は平坦である。地山までの深さは、Ａトレンチでは現地表から約3.4mである。

Ａ～Ｄトレンチの土層状況を確認すると、表土直下にある再堆積土にはビニールシート等が混入し近年埋め戻され畑地に造成されたと考えられる。旧状は近年まで完全に埋まりきらず、窪地状に堀の痕跡が残っていたと思われる。

### ２．遺構の分布

前述したように、Ａ～Ｄトレンチは調査地西側に存在した堀跡部分に当たり、堀底まで完掘していないので特に遺構は認められない。Ⅱ区ではグリッド東西軸ｄ～ｅに堀跡西側の落ち込み線が確認された。さらにその北側で堀跡東側の落ち込み線が検出され、堀はこの部分で屈曲した状況を呈している。

Ⅰ区ではグリッド南北軸３付近に南北に連なる地山の落ち込みがあり、その西側は地山が深くなり堀跡へと移行すると考えられる。その縁辺に土塁状の施設（ＳＭ１）と柵と考えられる柱穴列（ＳＡ２）が検出された。この落ち込み線の東は地山が浅く比較的多くの遺構が存在するが、グリッド軸３～４列付近に掘立柱建物跡（ＳＢ３、ＳＢ４）、柱穴、土坑等が密に分布し、その東側では柱穴が少なく土坑が多く認められる傾向にある。



## Ⅲ　検出された遺構

### １　掘立柱建物跡（ＳＢ３、ＳＢ４）

Ⅰ区の南北方向に走る地山の落ち込み線東側で多くの柱穴が検出されたが、建物跡として確認されたのは２棟である。ＳＢ３は南辺のみの検出であるため全体の規模は調査区外のため不明であるが、梁間２間である。柱穴はＥＰ５～ＥＰ７で構成され柱間は1.1mの等間である。掘り方は25～35㎝の方形でＥＰ６が45㎝と大きい。ＥＰ５とＥＰ７のほぼ中央に径約10㎝の円形のアタリがある。

ＳＢ４はＳＢ３に接した南側で確認された建物跡で桁行３間以上×梁間１間の南北棟で、西側に１間の庇が付く建物跡である。柱間は梁方向1.4m、桁方向1.2mで庇部分は1.1m程の等間である。検出された柱穴はＥＰ８～ＥＰ16で、掘り方は方形で一辺30㎝、中央部に径約15㎝の円形を呈するアタリがある。

### ２　土塁状遺構（ＳＭ１）と柵列（ＳＡ２）

掘立柱建物跡が確認された西側から地山が落ち込み堀跡へと移行するが、その落ち込み底部の傾斜変換線にそって堀の走行と一致するように土塁状の高まりが検出された。検出された長さは約５m、平均幅1.6mで、東側地山面からの高さ20㎝である。調査ではその中央部にサブトレンチを設け断ち割りを行ったが、それによれば地山の砂質土の上に粘質な淡褐色土や黒色土を互層状に積み上げて構築している状況が把握できる。

ＳＡ２はＳＭ１の西肩部分にＳＭ１とほぼ同一の主軸で連なる柱穴列で、６個の柱穴が検出された。各柱穴は径20～25㎝の円形で直に掘り込まれており、深さは約25㎝である。柱間は一定せず0.9～1.2mを計る。

### ３　土杭（ＳＫ）と道路状遺構（ＳＲ）

土坑はⅠ区のほぼ全域から検出されたが、特にⅠ区東端部に多く認められる。平面形は円形、隅丸方形、長楕円形を呈し、深さ30㎝程の浅い皿状で一部に礫石を含むものがある。出土遺物は特に認められない。

道路状遺構（ＳＲ）はⅠ区グリッド軸４～５列にかけて確認されたもので、南北方向に走り両側に側溝と考えられる溝が並行して存在する。両側の溝幅は15～25㎝で、溝で区画された道路幅は約90㎝である。路面には部分的に径10㎝程度の礫石の集中する部分が認めれる。

## Ⅳ　調査のまとめと考察

高楯城跡については、今次調査を含め計３回の調査が実施された。前２回の調査は曲輪群が

所在する丘陵山麓部分を対象としたもので、主・副郭を囲むように堀が存在し、隣接した山麓平地に掘立柱建物跡や井戸などの城館跡に付属した遺構の存在が確認されている。

今次の調査地は城館跡中心部からかなり距離を置いた地点であり、直接時期を特定できる遺物の出土も確認できなかったが、遺構の切り合いから少なくとも３時期以上の変遷が想定される。高楯城は南に隣接する山野辺城とともに、西側に連なる出羽丘陵の山麓部から舌状に東に張り出す台地突端の低丘陵に立地している。大手口は城館跡がある丘陵端部の東山麓にあり、今次の調査地点は西側の搦め手側に当たると考えられる。搦め手側は立地的に出羽丘陵山麓から地続きの状況であり、防御的に脆弱な側面を指摘できる。

今次調査で確認された堀跡は、部分的な調査でありその全容は把握し得ないが、Ⅱ区で大きくＬ字形に屈曲する状況が確認された。その幅は上場で約25ｍである。またＡ～Ｄトレンチの土層は堀に堆積したものであり、堀幅は20～35ｍ程度と考えられ近年まで完全に埋まりきらず低湿地状の窪地をなしていたようである。村絵図等によれば、この堀跡に相当する部分は屈曲し蛇行した状況で描かれており、その描写と符号する。また、堀の落ち込み部分は箱堀状に大規模に掘削し整えている状況ではなく、地形的に存在していた窪地を部分的に改変し西側外郭を区画する施設として機能したと想定される。土塁状遺構や柵列、堀の落ち込みに接して検出された長屋風の南北棟建物跡などは城地の西縁に設置された防御施設であった可能性が高く、屈曲して張り出した堀のコーナー部分に了広寺などの寺院を配置した計画的な区割がなされていたと考えられる。

高楯城は宝徳元年（1449）に荒砥方面からの白鷹丘陵を越える交通路、寒河江の大江氏に対する最上領内の境目の位置に武田信安が築城したとされる。その後、最上氏の一族である高楯遠江守正福が城主となり、元和８年（1622）最上氏の改易により廃城となった。調査では当該期の遺物は出土せず、日常的な城下の町場とは考えられず、堀跡に近接した地域にのみ主要な遺構が分布しⅠ区東側には土坑等が確認されたのみである。時期は特定できないが、今次の調査地は町場を包括した城館の西側縁辺を画する施設の一端を示していると考えられる。

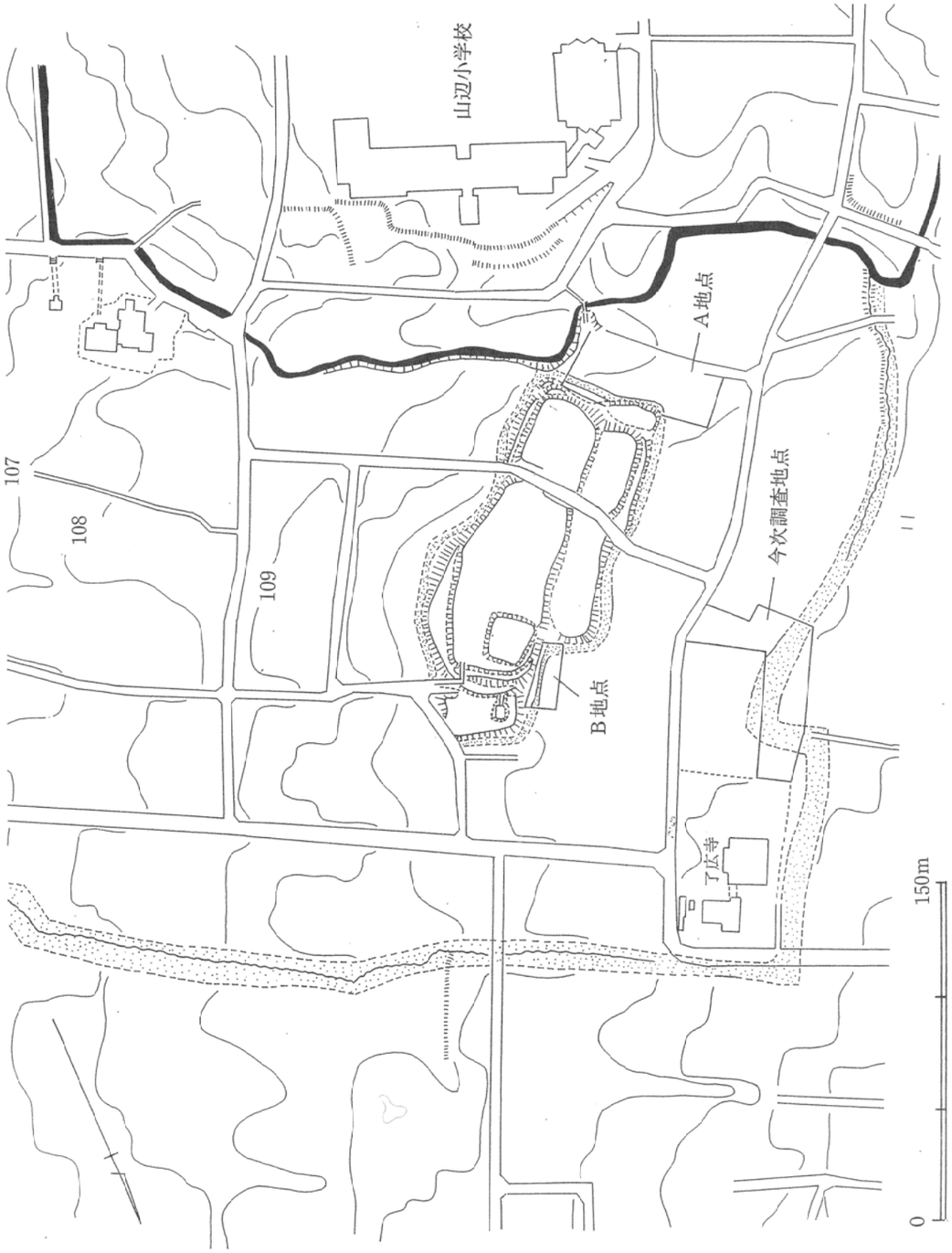
〈参考・引用文献〉

山辺町教育委員会　『高楯城跡発掘調査報告書』山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第９集 2000年

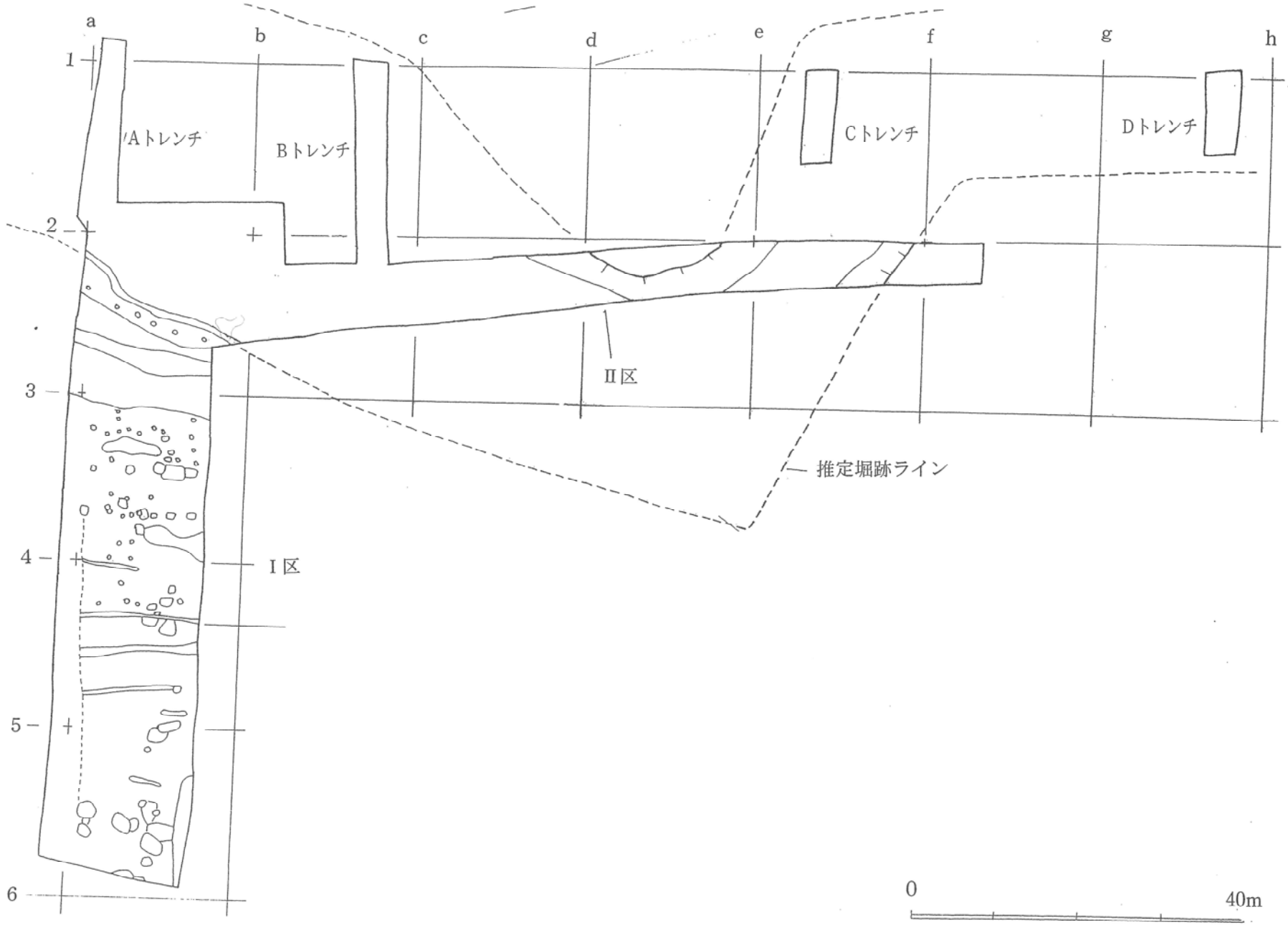
山辺町　『山辺町史上巻』平成16年

山形県教育委員会　『山形県中世城館遺跡調査報告書』1996年

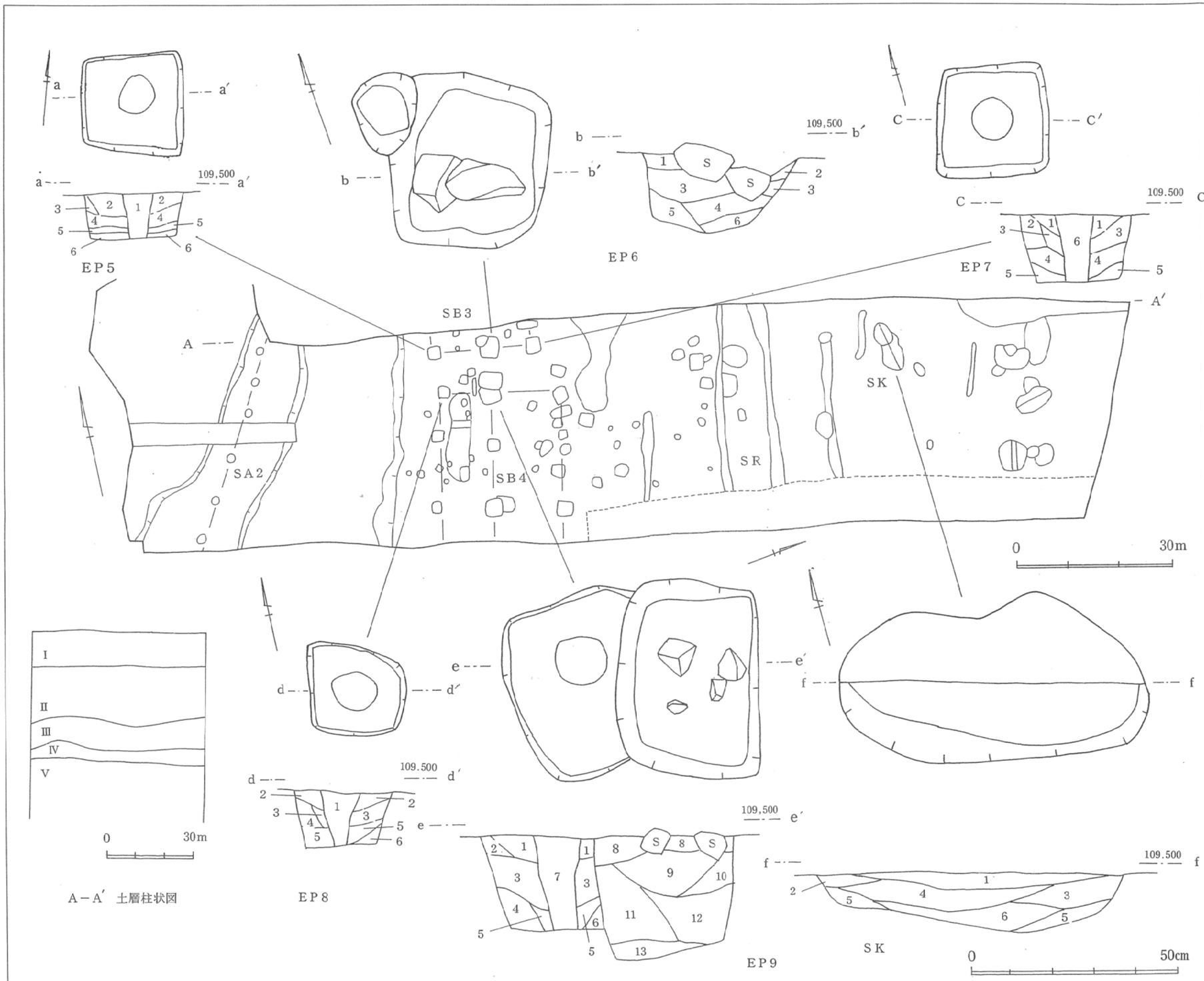





第１図　高楯城全体図



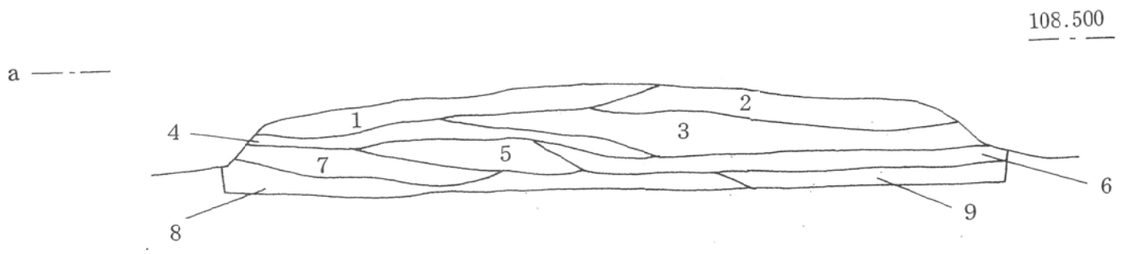

第２図　調　査　区　全　体　図




第３図　Ⅰ区遺構配置図・集成図

| 遺構番号 | セクション記号 | 層序 | 土層 | 注記 |
|---|---|---|---|---|
| 基本層序（第3図） | Ⅰ区壁面 | Ⅰ | 表土 | |
| | | Ⅱ | 淡茶褐色土 | |
| | | Ⅲ | 暗黄灰色土 | |
| | | Ⅳ | 暗黄褐色土 | 砂質 |
| | | Ⅴ | 黄褐色土 | 地山、粗砂 |
| EP5（第3図） | 断面 | a－a′ 1 | 黒色粘質土 | アタリ |
| | | 2 | 暗茶褐色土 | |
| | | 3 | 暗黄褐色土 | |
| | | 4 | 黄褐色土 | |
| | | 5 | 暗灰褐色土 | |
| | | 6 | 暗灰褐色砂質土 | 地山の砂質土を多く含む |
| EP6（第3図） | 断面 | b－b′ 1 | 暗茶褐色土 | |
| | | 2 | 茶黒色土 | |
| | | 3 | 暗黄褐色土 | |
| | | 4 | 暗灰褐色砂質土 | |
| | | 5 | 暗灰褐色土 | |
| | | 6 | 黄褐色土 | 地山土を多く含む |
| EP7（第3図） | 断面 | c－c′ 1 | 暗茶褐色土 | |
| | | 2 | 暗黄褐色土 | |
| | | 3 | 黄褐色土 | |
| | | 4 | 暗茶褐色土 | |
| | | 5 | 暗灰褐色砂質土 | |
| | | 6 | 黒色粘質土 | アタリ |
| EP8（第8図） | 断面 | d－d′ 1 | 黒色粘質土 | アタリ |
| | | 2 | 暗茶褐色土 | |
| | | 3 | 黄褐色土 | |
| | | 4 | 暗灰褐色土 | |
| | | 5 | 灰褐色砂質土 | |
| | | 6 | 茶黒色砂質土 | |

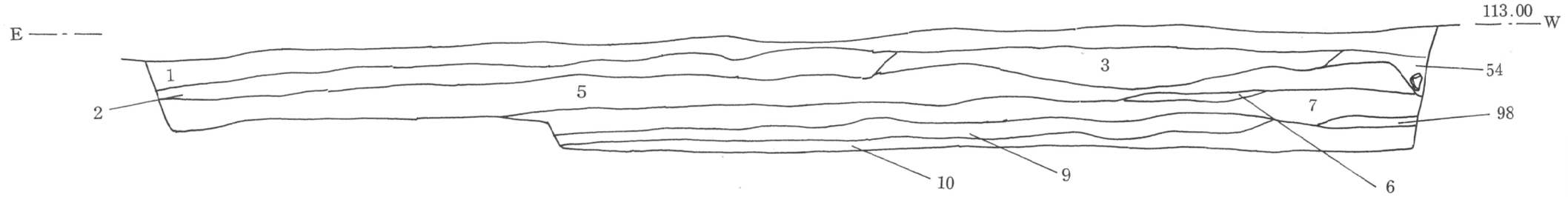
| 遺構番号 | セクション記号 | 層序 | 土層 | 注記 |
|---|---|---|---|---|
| EP9（第3図） | 断面 | e－e′ 1 | 暗茶褐色土 | |
| | | 2 | 暗黄褐色土 | |
| | | 3 | 黄褐色土 | |
| | | 4 | 暗灰褐色土 | |
| | | 5 | 暗灰褐色砂質土 | |
| | | 6 | 灰黒色土 | |
| | | 7 | 黒色粘質土 | |
| | | 8 | 淡黒茶色土 | 準大礫を含む |
| | | 9 | 黒色土 | |
| | | 10 | 暗黒茶色土 | |
| | | 11 | 暗褐色土 | |
| | | 12 | 暗灰黒色土 | |
| | | 13 | 灰黒色砂質土 | |
| SK（第3図） | ベルト | f－f′ 1 | 淡黒色土 | |
| | | 2 | 暗茶褐色土 | |
| | | 3 | 黒茶色土 | |
| | | 4 | 黒色粘質土 | |
| | | 5 | 暗灰黒色砂質土 | |
| | | 6 | 黒色シルト | |



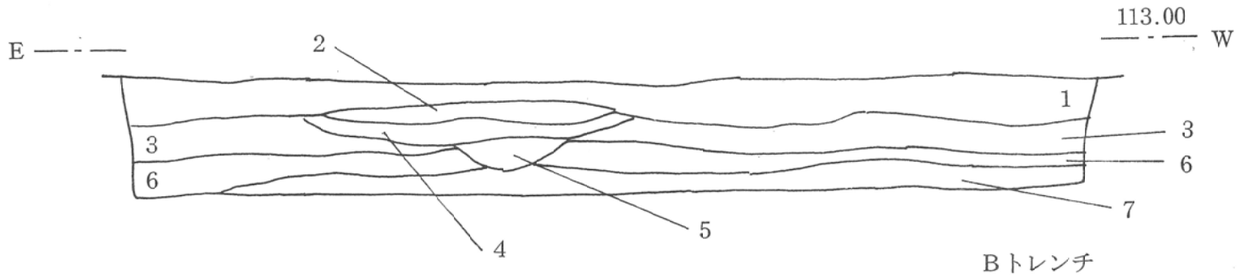

| SM1（第4図） | サブトレンチ | a－a′ | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 1 | 明茶褐色粘質土 | |
| | | | 2 | 茶褐色土 | 風化した地山砂礫を含む |
| | | | 3 | 灰褐色砂質土 | 粗砂質 |
| | | | 4 | 灰黒色粘質土 | |
| | | | 5 | 暗褐色土 | |
| | | | 6 | 暗茶褐色土 | |
| | | | 7 | 茶褐色土 | |
| | | | 8 | 淡青灰色砂層 | 地山 |
| | | | 9 | 暗青灰色砂層 | 地山 |

0　50cm

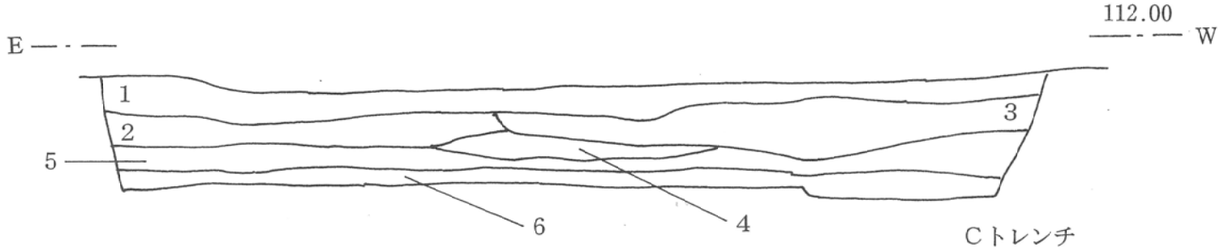
第４図　Ｉ区遺構部分図　ＳＭｌ断面図



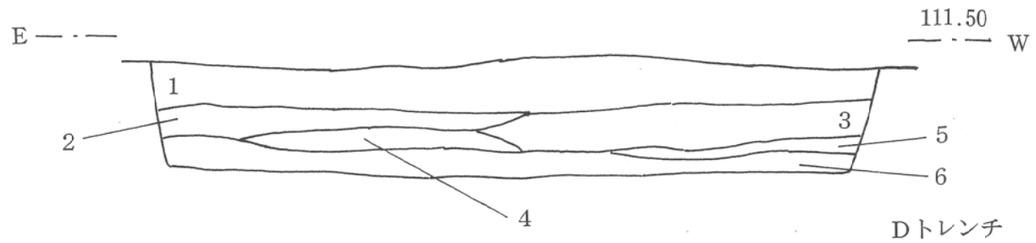

Aトレンチ




Bトレンチ




Cトレンチ




Dトレンチ

| トレンチ名 | | セクション記号 | 層序 | 土層 | 注記 |
|---|---|---|---|---|---|
| A | 南壁 | | 1 | 表土 | |
| | | | 2 | 暗灰褐色砂質土 | |
| | | | 3 | 砂利層 | 埋戻し土 |
| | | | 4 | 灰褐色土 | 再堆積土 |
| | | | 5 | 木炭・炭化物層 | 再堆積土 |
| | | | 6 | 黄褐色粗砂 | |
| | | | 7 | 暗黄褐色土 | 旧表土 |
| | | | 8 | 暗茶褐色土 | |
| | | | 9 | 暗茶黒色粘質土 | 均一なシルト質 |
| | | | 10 | 茶黒色シルト | |
| B | 南壁 | | 1 | 表土 | |
| | | | 2 | 暗茶褐色砂層 | |
| | | | 3 | 淡茶黄色土 | |
| | | | 4 | 茶褐色土 | |
| | | | 5 | 暗褐色土 | |
| | | | 6 | 暗茶黒色シルト | |
| | | | 7 | 黒色粘質土 | |
| C | 南壁 | | 1 | 表土 | |
| | | | 2 | 淡茶褐色土 | |
| | | | 3 | 暗茶褐色土 | |
| | | | 4 | 暗褐色土 | |
| | | | 5 | 暗茶黒色シルト | |
| | | | 6 | 黒色粘質土 | |
| D | 南壁 | | 1 | 表土 | |
| | | | 2 | 淡褐色土 | |
| | | | 3 | 山砂利層 | 埋戻し土 |
| | | | 4 | 黒色土 | 炭化物を大量に含む |
| | | | 5 | 暗茶黒色シルト | |
| | | | 6 | 黒色粘質土 | |

0 20cm

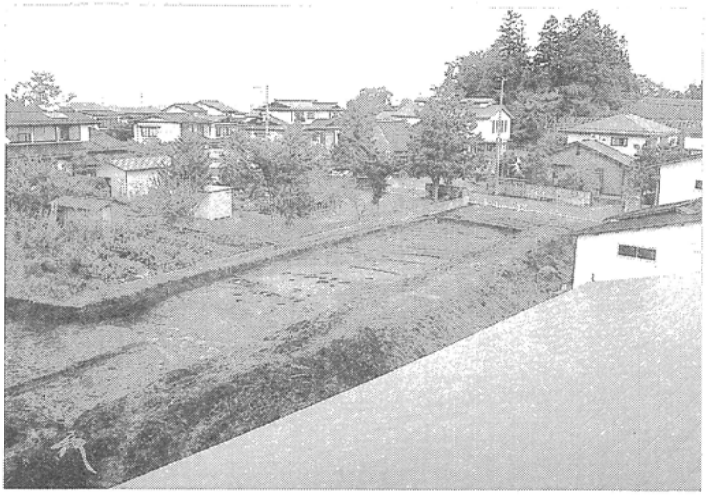
第5図　各トレンチ土層集成図

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たかだてじょうあとはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 高楯城跡（外郭西辺部地区）発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第１４集 |
| 編著者名 | 茨木光裕 |
| 発行機関<br>所在地 | 山辺町教育委員会<br>〒990-0392　山形県東村山郡山辺町緑ケ丘５番地　ＴＥＬ023－667－1115 |
| 発行年月日 | 2007年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | |
| 高楯城<br>（たかだてじょう） | 山形県<br>（やまがたけん）<br>東村山郡<br>（ひがしむらやまぐん）<br>山辺町<br>（やまのべまち）<br>大字山辺<br>（おおあざやまのべ）<br>字芦沢<br>（あざあしざわ） | 6301 | 346<br><br>山辺町<br>遺跡番号<br>ＹＭ２ | ３８度<br>１７分<br>５９秒 | １４０度<br>１５分<br>４９秒 | 20060926<br>∫<br>20061026 | 2,208.43㎡ |

| 所収遺跡名 | 調査原因 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高楯城 | 民間宅地<br>造成工事 | 城館跡 | 中世・戦国期<br>近世 | 堀跡　１条<br>建物跡　２棟<br>土塁状遺構<br>柵列<br>道路状遺構<br>溝跡<br>土坑<br>柱穴 | 近世陶磁器 | |



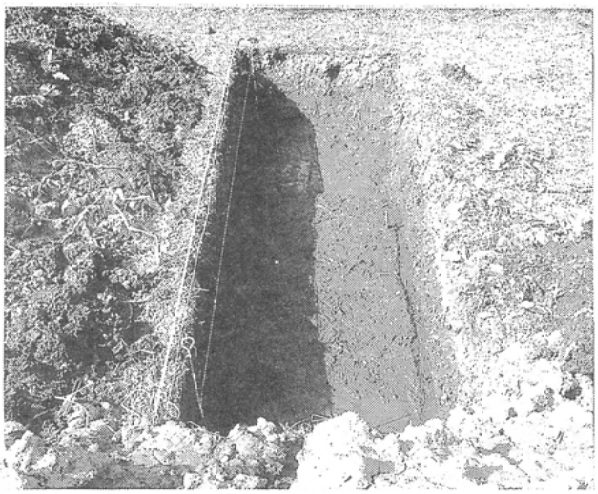
Ⅰ区　全　　景

調　査　状　況

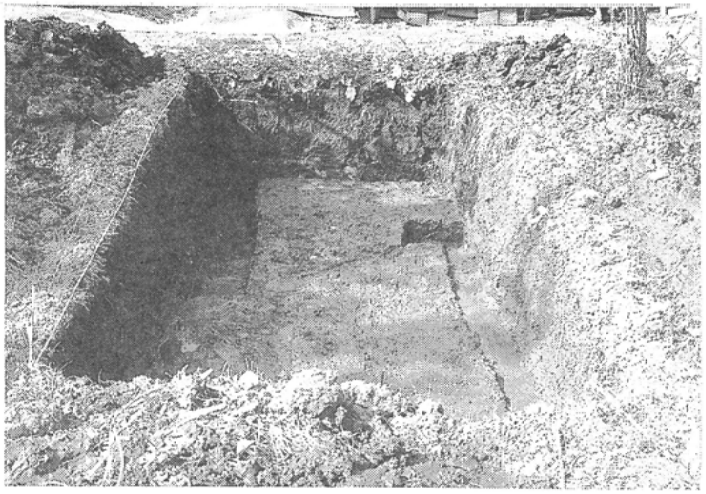
Ⅰ区遺構検出状況

Ⅱ区　全　　景

ＳＭⅠ検出状況（南から）



Cトレンチ全景（東から）

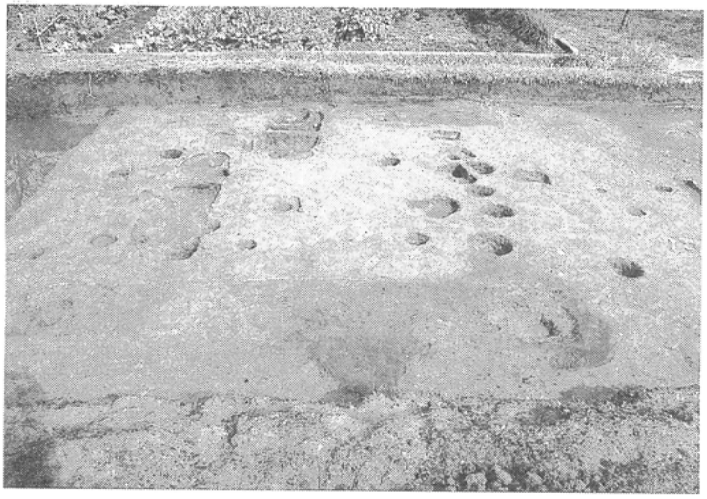


Dトレンチ全景（東から）

Ⅱ区　堀跡検出状況（南から）

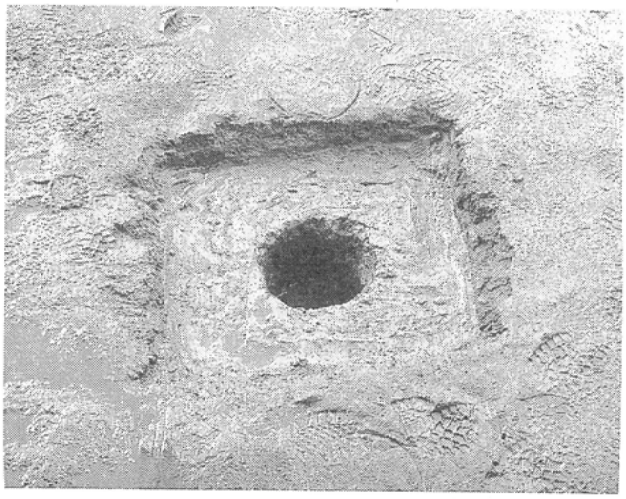
Dトレンチ南壁土層断面

Ⅰ区　SB3・SB4　検出状況（南から）

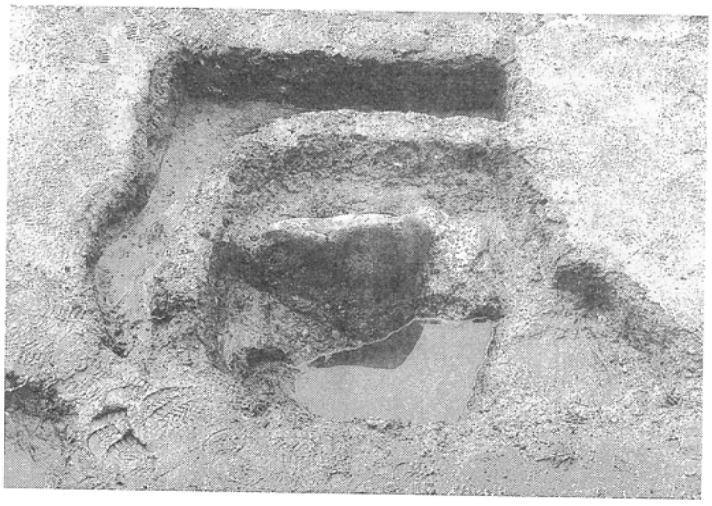


Ⅰ区　ＳＢ３・ＳＢ４　近景（南から）

ＥＰ５　検出状況



ＥＰ８　検出状況

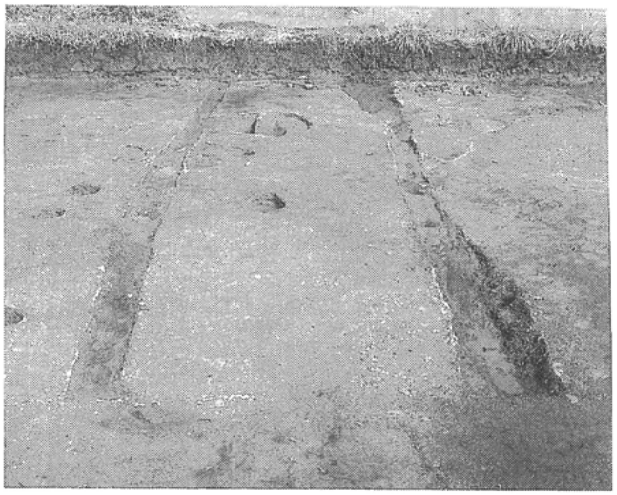


ＥＰ６　検出状況

ＳＭⅠ　トレンチ北壁土層断面

ＥＰ検出状況（北から）

ＳＫ検出状況



ＳＲ検出状況（南から）

ＳＤ・ＥＰ　検出状況

ＳＲ検出状況（南西から）

山形県山辺町埋蔵文化財調査報告書第１４集
高楯城跡（外郭西辺部地区）発堀調査報告書
平成１９年３月　発行
発行　山辺町教育委員会
印刷　大　滝　印　刷